

十六夜

泉鏡太郎

青空文庫

きのふは仲秋十五夜で、無事平安な例年にもめづらしい、一天澄渡つた明
 月であつた。その前夜のあの暴風雨をわすれたやうに、朝から晴れ／＼とした、お
 天氣模様で、辻へ立つて日を禮したほどである。おそろしき大地震、大火の爲に、大
 都は半阿鼻焦土となんぬ。お月見でもあるまいが、背戸の露草は青く冴えて露にさく。
 ……廂破れ、軒漏るにつけても、光りは身に沁む月影のなつかしきは、せめて薄ばかり
 も供へようと、大通りの花屋へ買ひに出すのに、こんな時節がら、用意をして賣つてゐ
 るだらうか。……覺束ながると、つかひに行く女中が元氣な顔して、花屋になれば
 向う土手へ行つて、葉ばかりでも折つぺしよつて來ませうよ、といった。いふことが、天
 變によつてきたへられて徹底してゐる。
 女でさへその意氣だ。男子は働かなければならない。——こゝで少々小聲になるが、
 お互に稼がなければ追つ付かない。……
 既に、大地震の當夜から、野宿の夢のまださめぬ、四日の早朝、眞黒な顔をし

て見舞みまひに來たき。……前に内ぜんうちにゐて手てまはりはたらを働はたらいてくれた淺草あさくさツ娘こむこの婿むこの裁縫屋したてやなどは、土地とちの淺草あさくさで丸燒まるやけに燒やけ出だされて、女房にようぼうには風呂敷ふろしきを水みづびたしにして髪かみにかぶせ、おんぶした嬰兒あかんぼには、ねんねねこを濡ぬらしてきせて、火ひの雨あめ、火ひの風かぜの中なかを上野うへへ遁にがし、あとで持もち出だした片手かたてさげの一荷いつかさへ、生命いのちの危あやふさに打うつちやつた。……何とかや——いと呼よんでさがして、漸やうやく竹たけの臺だいでめぐり合あひ、そこも火ひに追おはれて、三河島みかはしまへ遁にげのびてゐるのだといふ。いつも來くる時ときは、縞しももののそろひで、おとなしづくりの若い男わかをとこで、女をんなの方が年下とししたの癖くせに、薄手うすての圓鬘まげでじみづくりの下町したまち好このみをさまつてゐるから、姉あ女ね房ようぼうに見みえるほどののだが、「嬰兒あかんぼが乳ちちを吞のみますから、私あつしは何どうでも、彼女あれには實みに成なるものの一口ひとくちも食くはせたくござんすから。」——で、さしあたり仕立したてものなどの談あつらへはないから、忽たちまち荷車にぐるまを借かりて曳ひきはじめた——これがまた手取てつとり早はやい事ことには、どこかそこらに空車あきぐるまを見みつけて、賃貸ちんがしをしてくれませんかと聞きくと、燒やけ原はらに突つき立つた親仁おやちが、「かまはねえ、あいてるもんだ、持つてきねえ。」と云いつたさうである。人ひとごみの避難所ひなんじよへすぐ出向でむいて、荷物にもつの持もち運びはこびをがたりくやつたが、いゝ立たて前まへになる。……そのうち場所ばしよの事ことだから、別べつに知しり合あひでもないが、柳橋やなぎばしのらしい藝妓げいしやが、青あをや山の知邊しるべへ遁にげるのだけれど、途中とちう不案内ふあんないだし、一人ひとりぢや可恐こはいから、兄にいさん送おくつて

くだ
下さいな、といったので、おい、合點と、乗せるのでないから、そのまゝ荷車を道
端にうつちやつて、手をひくやうにしておくり届けた。「別嬪でござんした。」たゞ
でもこの役はつとまる所をしみ／＼禮をいはれた上に、「たんまり御祝儀を。」とよご
れくさつた半纏だが、威勢よく井をたゝいて見せて、「何、何をしたつて身體さへ働か
せりや、彼女に食はせて、乳はのまされます。」と、仕立屋さんは、いそぐと歸つてい
つた。——年季を入れた一ぼしの居職がこれである。

それを思ふと、机に向つたなりで、白米を炊いてたべられるのは勿體ないと云つて
もいゝ。非常の場合だ。……稼がずには居られない。

社にお約束の期限はせまるし、……實は十五夜の前の晩あたり、仕事にかゝらうと思
つたのである。所が、朝からの吹き降り、日が暮れると警報の出た暴風雨である。
電燈は消えるし、どしや降りだし、風はさわぐ、ねずみは荒れる。……急ごしらへの油
の足りない白ちやけた提灯一具に、小さくなつて、家中が目ばかりぱち／＼として、
陰氣に滅入つたのでは、何にも出來ず、口もきけない。拂底な蠟燭の、それも細くて、
穴が大きく、心は暗し、數でもあればただけれども、祕藏の箱から……出して見た覚えはな
いけれど、寶石でも取出すやうな大切な、その蠟燭の、時よりも早くぢり／＼と立

つて行くのを、氣を萎して、見詰めるばかりで、かきもの所の沙汰ではなかつた。

二一

戸をなぐりつける雨の中に、風に吹きまはされる野分聲して、「今晚——十時から十一時までの間に、颯風の中心が東京を通過するから、皆さん、お氣を付けなされるやうにといふ、たゞ今、警官から御注意がありました。——御注意を申します。」と、夜警當番がすぐ窓の前を觸れて通つた。

さらぬだに、地震で引傾いでゐる借屋である。颯風の中心は魔の通るより氣味が悪い。——胸を引緊め、袖を合せて、ゐすくむと、や、や、次第に大風は暴れせまる。……一しきり、一しきり、たゞ、辛き息をつかせては、ウゝゝゝ、ヒューとうなりを立てる。浮き袋に取り付いた難破船の沖のやうに、提灯一つをたよりにして、暗闇にたゞよふうち、さあ、時かれこれ、やがて十二時を過ぎたと思ふと、氣の所爲か、その中心が通り過ぎたやうに、がうくと戸障子をゆるする風がぎツと屋の棟を拂つて、やゝ軽くなるやうに思はれて、突つ伏したのも、僅に顔を上げると……何うだらう、忽ち幽

怪なる夜陰の汽笛が耳を多くつて間ぢかに聞えた。「あゝ、(ウウ)が出来ますよ。」と
 家内があをい顔をする。——この風に——私は返事も出来なかつた。

カチ、カチ、カ、カ

カチ、カチ、カ、カ

雨にしづくの拍子木が、雲の底なる十四日の月にうつるやうに、袖の黒さも目に浮
 かねで、四五軒北なる大銀杏の下に響いた。——私は、霜に睡をさました劍士のやうに、
 付け焼き刃に落ちついて聞きすまして、「大丈夫だ。火が近ければ、あの音が屹とみだ
 れる。」「……カチカチカ、チ。「静かに打つてゐるのでは火事は遠いよ。」「まあ、さう
 ね。」「といふ言葉も、果てないのに、「中六」「中六」と、ひしめきかはす人々
 の聲が、その、銀杏の下から車輪の如く軋つて來た。
 續いて、「中六が火事ですよ。」「と呼んだのは、再び夜警の聲である。やあ、不可い
 なかく、中六と言へば、長い梯子なら届くほどだ。然も風下、眞下である。私たちは黙つて立
 つた。青ざめた女の臉も決意に紅に潮しつゝ、「戸を開けないで支度をしませう。」「地震
 以來、解いた事のない帯だから、ぐいと引しめるだけで事は足りる。「度々で濟みませ
 ん。——御免なさいませよ。」「と、やつと佛壇へ納めたばかりの位牌を、内中で、此

ばかりは金色に、キラリと風呂敷に包む時、毛布を撥ねてむつくり起上つた——下宿を焼かれた避難者の濱野君が、「逃げるゝと極めたら落着きませう。いま火の様子を。」とがらりと門口の雨戸を開けた。可恐いもの見たさで、私もふつと立つて、框から顔を出すと、雨と風とが横なぐりに吹つける。處へ——靴音をチャク／＼と刻んで、銀杏の方から來なすつたのは、町内の白井氏で、おなじく夜警の當番で、「あゝもう可うございます。漏電ですが消えました。——軍隊の方も、大勢見えてゐますから安心です。」「何とも、ありがたう存じます——分けて今晚は御苦勞様です……後に御加勢にまゐります。」「おなじく南となりへ知らせにおいで、白井氏のレインコートの裾の、身かららんで、煽るのを、濛々たる雲の月影に見おかつた。

この時も、戸外はまだ散々であつた。木はたゞ水底の海松の如くうねを打ち、梢が窪んで、波のやうに吹亂れる。屋根をはがれたトタン板と、屋根板が、がたん、ぱり／＼と、競を追つたり、入りみだれたり、ぐる／＼と、踊り燥ぐと、石瓦こそ飛ばないが、狼藉とした罐詰のあき殻が、カラカランと、水鶏が鐵棒をひくやうに、雨戸もたゞけば、溝端を突駛る。溝に浸つた麥藁帽子が、竹の皮と一所に、プンと臭つて、眞つ黒になつて撥上がる。……もう、やけになつて、鳴きしきる蟲の音を合方

に、夜行の百鬼が跳梁跋扈の光景で。——この中を、折れて飛んだ青い銀杏の
 一枝が、ざぶりと雨を灌いで、波状に宙を舞ふ形は、流言の鬼の憑ものがした
 やうに、「騒ぐな、おのれ等——鎮まれ、鎮まれ。」と告つて壓すやうであつた。
 「私も薪雜棒を持つて出て、亞鉛と一番、鎬を削つて戦はうかな。」と喧嘩過ぎて
 の棒ちぎりで擬勢を示すと、「まあ、可かつたわね、ありがたい。」と嬉しいより、あり
 がたいのが、斯うした時の眞實で。
 「消して下すつた兵隊さんを、こゝでも拜ませう。」と、女中と一所に折り重な
 つて門を覗いた家内に、「怪我をしますよ。」と叱られて引込んだ。

三

誠にありがたがるくらゐでは足りないのである。火は、亞鉛板が吹つ飛んで、送電
 線に引掛つてるのが、風ですれて、線の外套を切つたために發したので。警備隊
 から、驚破と駈つけた兵員達は、外套も被なかつたのが多いさうである。危険を冒
 して、あの暴風雨の中を、電柱を攀ぢて、消しとめたのであると聞いた。——颯風の

過ぎる警告のために、一人駈けまはつた警官も、外套なしに骨までぐしよ濡れに濡れ通つて——夜警の小屋で、餘りの事に、「おやすみになるのに、お着替がありません。——休息に、同僚のでも借りられればですが、大抵はこのまゝ寝ます。」との事だつたさうである。辛勞が察しらるゝ。

雨になやんで、葉うらにすくむ私たちは、果報といつても然るべきであらう。

曉方、僅にとろりとしつゝ目がさめた。寝苦しい思ひの息つきに朝戸を出ると、あの通り暴れまはつたトタン板も屋根板も、大地に、ひしとなつてへたばつて、魍魎を跳らした、ブリキ罐、瀬戸のかけらも影を散らした。風は冷く爽に、町一面に吹きしいた眞蒼な銀杏の葉が、そよよと葉のへりを優しくそよがせつゝ、芬と、樹の秋の薫を立てる。……

早起きの女中がぎぶく、さらくと、早、その木の葉をはく。……化けさうな古箒も、唯見ると銀杏の簪をさした細腰の風情がある。——しばらく、雨ながら戸に敷いたこの青い葉は、そのまゝにながめたし。「晩まで掃かないで。」と、留めたかつた。が、時節がらである。落ち葉を掃かないのさへ我儘らしいから、腕を組んでだまつて視

た。

裏うらの小庭こにはで、雀すずめと一いつ所に、嬉うれしさうな聲こゑがする。……昨夜ゆうべ、戸外おもてを舞ま靜ひめた、それらしい、銀杏いんぎふの折をれ枝えだが、大屋根おほやねを越こしたが、一ひとつ坪ぼばかりの庭にはに、瑠璃るり淡あはく咲さいて、もう小ちひさくなつた朝顔あさがほの色いろに繼すがるやうに、たわゝに掛かつた葉はの中に、一ひとつ粒つぶ、銀杏ぎんなんの實みのついたのを見みつけたのである。「たべられるものか、下卑げびなさんな。」「なぜ、何どうして？」「いちじくとほちがふ。いくら食くひしん坊ぼうでも、その實みは黄色きいろくならなくつては。」
「へい。」と目めを丸まるくして、かざした所ところは、もち手ては借家しゃくかの山やまの神かみだ、が、露つゆもこぼるゝ。枝えだに、大慈だいじの楊柳やうりうの俤おもかげがあつた。

——ところで、前段ぜんだんにいつた通り、この日はめづらしく快晴くわいせいした。

……通りとほの花屋はなや、花政はなまさでは、きかない氣きの爺ぢいさんが、捻鉢ねちばち巻まきで、お月見つきみのすゝき、紫苑しをん、女郎花むすめも取添とりそへて、おいでなせえと、やつて居あた。葉はに打うつ水みづもいさぎよい。

可よし、この様子やうすでは、歳時記さいじきどほり、十五夜じふごやの月つきはかゞやくであらう。打ちつゞく悪鬼あくきばらひ、屋をくを壓あつする黒雲くろくもをぬぐつて、景氣けいきなほしに「明月めいげつ」も、しかし沙汰さた過ぎるから、せめて「良夜りやうや」とでも題だいして、小篇せうへんを、と思おもふうちに……四五人しごにんのお客きやくがあつた。

いづれも厚情、懇切のお見舞である。

打ち寄せれば言ふ事よ。今度の大災害につけては、先んじて見舞はねばならない、焼け残りの家の無事な方が後になつて——類焼をされた、何とも申しやうのない方たちから、先手を打つて見舞はれる。壁の破れも、防がねばならず、雨漏りも留めたし、……その何よりも、火をまもるのが、町内の義理としても、大切で、煙草盆一つにも、一人はついで居なければならぬやうな次第であるため、ひつ込みじあんに居すくまつて、小さくなつてゐるからである。

四

早く、この十日ごろにも、連日の臆病づかれで、寝るともなしにころがつてゐると、「鏡さんはあるかい。——何は……あなさるかい。」と取次ぎ……といふほどの奥はない。出合はせた女中に、聞きなれない、かう少し掠れたが、よく通る底力のある、そして親しい聲で音づれた人がある。「あ、長さん。」私は心づいて飛び出した。はたして松本長であつた。

この能役者は、木曾の中津川に避暑中だったが、猿樂町の住居はもとより、寶生の舞臺をはじめ、芝の琴平町に、意氣な稽古所の二階屋があつたが、それもこれも皆灰燼して、留守の細君——（評判の賢婦人だから厚禮して）——御新造が子供たちを連れて辛うじて火の中のをがれたばかり、何にもない。歴乎とした役者が、ゴム底の足袋に巻きゲートル、ゆかたの尻ばしよりで、手拭を首にまいてやつて来た。「いや、えらい事だつたね。——今日も焼けあとを通つたがね、學校と病院に火がかゝつたのに包まれて、駿河臺の、あの崖を攀ち上つて逃げたさうだが、よく、あの崖が上られたものだと思ふよ。ぞつとしながら、つく／＼見たがね、上がらうたつて上がれさうな所ぢやない。女の腕に大勢の小兒をつれてゐるんだから——いづれひと、誰かが手を取り、肩をひいてくれたんだらうが、私は神佛のおかげだと思つて難人が、有がつてゐるんだよ。——あゝ、裝束かい、皆な灰さ——面だけは近所のお弟子りがた

が駈けつけて、残らずたすけた。百幾つといふんだが、これで寶生流の面目は立ちます。裝束は、いづれ年がたてば新しくなるんだから。」と蜀江の錦、吳漢の綾、足利絹もものともしないで、「よそぢや、この時節、一本お燭でもないからね、ビールさ。久しぶりでいゝ心持だ。」と熱燭を手酌で傾けて、「親類うちで一軒

でも焼けなかつたのがお手柄だ。」といつて、うれしさうな顔をした。うらやましいと言はないまでも、結構だともいふことか、手柄だといつて讃めてくれた。私は胸がせまつた。と同時に、一藝に達した、いや——從兄弟だからグツと割びく——たづさはるものの意氣を感じた。神田兒だ。彼は生拔きの江戸兒である。

その日、はじめて店をあけた通りの地久庵の蒸籠をつるくと平げて、「やつと蕎麥にありついた。」と、うまさうに、大胡坐を搔いて、また飲んだ。

印半纏 一枚に焼け出されて、いさゝかもめげないで、自若として胸をたゞいて居るのに、なほ万ちやんがある。久保田さんは、まる焼けのしかも二度目だ。さすがに淺草の兄さんである。

つい、この間も、水上さんの元祿長屋、いや邸（註、建つて三百年といふ古家の二つがこれで、もう一つが三光社前の一棟で、いづれも地震にびくともしなかつた下六番町の名物である。）へ泊りに來てゐて、寝ころんで、誰かの本を讀んでゐた雅量は、推服に値する。

ついて話しがある。（猿どのの夜寒訪ひゆく兎かな）で、水上さんも、私も、場所はちがふが、兩方とも交代夜番のせこに出でゐる。町の角一つへだてつゝ、「いや、

御同役いかゞでござるな。」と互に訪ひつ訪はれつする。私があけ番の時、宵のうたゝねから覺めて辻へ出ると、こゝにつめてゐた當夜の御番が「先刻、あなたのところへお客がありましてね、門をのぞきなさるから、あゝ泉をおたづねですかと、番所から聲を掛けますと、いや用ではありません——番だといふから、ちよつと見に來ました、といつてお歸りになりました。戸をあけたまゝで、お宅ぢやあ皆さん、お寢みのやうでした。」との事である。

「どんな人です。」と聞くと、「さあ、はつきりは分りませんが、大きな眼鏡を掛けておいででした。」あゝ、水上さんのところへ、今夜も泊りに來た人だらう、万ちゃんだな、と私はさう思つた。久保田さんは、大きな眼鏡を掛けてゐる。——所がさうでない。來たのは瀧君であつた。評判のあの目が光つたと見える。これも讚稱にあたひする。

五

——さてこの日、十五夜の當日も、前後してお客が歸ると、もうそちこち晩方であつた。

例年だと、その薄を、高樓——もちとをかしいが、この家で二階だから高いにはちがひない。その月の出の正面にかざつて、もと手のかゝらぬお團子だけは堆く、さあ、成金、小判を積んで較べて見ると、飾るのだけれど、ふすまは外れる。障子の小間は、びりりと皆破れる。雑と掃き出したばかりで、煤もほこりも其のまゝで、まだ雨戸を開けないで置くらゐだから、下階の出窓下、すゝけた簾ごしに供へよう。お月様、おさびしうございませうかと、飾る。……その小さな臺を取りに、砂で氣味の悪い階子段を上がると、……ポンとにほつた。焦げるやうなほひである。ハツと思ふと、かう氣のせるか、立てこめた中に煙が立つ。私はバタ／＼と飛びおりた。「ちよつと來て見ておくれ、焦げくさいよ。」家内が血相して駈けあがつた。「漏電ぢやないか知ら。」——いちにちの地震以來、たばこ一服、火の氣のない二階である。「疊をあげませう。濱野さん……御近所の方、おとなりさん。」「騒ぐなよ。」とはいつたけれども、私も胸がドキ／＼して、壁に頬を押しついたり、疊を撫でたり、だらしはないが、火の氣を考へ、考へつゝ、雨戸を繰つて、衝と裏窓をあけると、裏手の某邸の廣い地尻から、ドス黒いけむりが渦を巻いて、もう／＼と立ちのぼる。「湯どのだ、正體は見届けた、あの煙だ。」といふと、濱野さんが鼻を出して、嗅いで見て、「いえ、あのにほひは石炭です。

一つ嗅いで來ませう。」と、いふことも慌てながら戸外へ飛び出す。——近所の人たちも、二三人、念のため、スネツチを切つて置いて、疊を上げた、が何事も無い。「御安心なさいまし、大丈夫でせう。」といふ所へ、濱野さんが、下駄を鳴して飛んで戻つて、「づかく庭から入りますとね、それ、あの爺さん。」といふ、某邸の代理に夜番に出て、ゐねむりをしいく、むかし道中をしたといふ東海道の里程を、大津からはじめ、幾里何町と五十三次、徒歩で饒舌る。……安政の地震の時は、おふくろの腹にゐたといふ爺さんが、「風呂を焚いてゐましてね、何か、嗅ぐと矢つ張り石炭でした、何か、よくきくと、たきつけに古新聞と塵埃を燃したさうです。そのにほひが籠つたんですよ。大丈夫です。——爺さんにいひますとね、（氣の毒でがんだなう。）といつてゐました。」箱根で煙草をのんだらうと、笑ひですんだから好いもの、薄に月は澄ながら、胸の動悸は静まらない。あいにくとまた停電で、蝋燭のあかりを借りつゝ、燈と共に手がふるふ。……なか／＼に稼ぐ所ではないから、いきつぎに表へ出て、近所の方に、たゞ今の禮を立話して居ると、人どよみを哄とつくつて、ばら／＼往來がなだれを打つ。小兒はさけぶ。犬はほえる。何だ。何だ。地震か火事か、と騒ぐと、馬だ、馬だ。何だ、馬だ。主のない馬だ。はなれ馬か、そりや大變と、屈竟な

のまで、軒下へパツと退いた。放れ馬には相違ない。引手も馬方もない畜生が、あの大地震にも縮まない、長い面して、のそりくと、大八車のしたゝかな奴を、たそがれの塀の片暗夜に、人もなげに曳いて伸して来る。重荷に小づけとはこの事だ。その癖、車は空である。

が、嘘か真か、本所の、あの被服廠では、つむじ風の火の裡に、荷車を曳いた馬が、車ながら炎となつて、空をきりくとつたと聞けば、あゝ、その馬の幽霊が、車の亡魂とともに、フト迷つて顯はれたかと、見るにもの凄いまで、この騒ぎに持ち出した、軒々の提灯の影に映つたのであつた。

かういふ時だ。在郷軍人が、シャツ一枚で、見事に轡を引留めた。が、この大きなものを、せまい町内、何處へつなぐ所もない。御免だよ、誰もこれを預からない。そのはずで。……然うかといつて、どこへ戻す所もないのである。少しでも廣い、中六へでも持ち出すかと、曳き出すと、人をおどろかしたにも似ない、おとなしい馬で、荷車の方が暴れながら、四角を東へ行く。……

酔つ拂つたか、寢込んだか、馬方め、馬鹿にしゃがると、異説、紛々たる所へ、提灯片手に息せいて、馬の行つた方から飛び出しながら「皆さん、晝すぎに、見付けの

米屋へ来た馬です。あの馬の面に見覚えがあります。これから知らせに行きます。」と、商家の中僧さんらしいのが、馬士に覚え、とも言はないで、呼ばはりながら北へ行く。町内一ぱいのえらい人出だ、何につけても騒々しい。

かう何うも、番ごと、どしんと、駭ろかされて、一々びく／＼して居たんでは行き切れない。さあ、もつて来い、何でも、と向う顛巻をした所で、馬の前へは立たれはしない。

夜ふけて、ひとり澄む月も、忽ち暗くなりはしないだらうか、眞赤になりはしないかと、おなじ不安に夜を過ぎした。

その翌日——十六夜にも、また晩方強震があつた——おびえながら、この記をつづる。

時に、こよひの月は、雨空に道行きをするやうなものではない。かう／＼しく、そして、やさしく照つて、折りしもあれ風一しきり、無慙にもはかなくなつた幾萬の人たちの、焼けし黒髪かと、散る柳、焦げし心臓かと、落つる木の葉の、宙にさまよふと見

ゆるのを、撫なで慰なぐさむるやうに、薄うす霧ぎりの袖そでの光ひかりを長ながく敷しいた。

大正十二年十月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「十六夜《いざよひ》」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十六夜

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>